

I 研究主題

運動の楽しさやできる喜びを味わい、運動にすすんで関わる児童の育成
～主体的・対話的で深い学びのある授業の工夫・改善を通して～

II 主題設定の理由

現行の学習指導要領において、体育科では、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育むこと」が目標として示されている。そして、体育科で育成を目指す資質・能力とは「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つを指している。この3つ資質を関連付けながら指導を進めていくために、自己の課題に気付いたり、課題の解決に向けて粘り強く取り組んだりする活動を意図的に配置することで、児童の主体的な学びを生み出すための授業改善が求められている。

そのために、串間市小体連では学習過程の中に自らの学習活動を振り返ったり、仲間と思考を深めたりする活動を位置付けることで主体的・対話的で深い学びのある授業を工夫してきた。

令和3年度より、ネット型ゲームにおける「主体的・対話的で深い学びのある授業」はどうすれば良いかを授業の工夫・改善の視点として、研究を進めてきた。

研究1年目では、学習課題を工夫し、「運動のポイント」を児童が意識できるような工夫やワークシートを工夫をしたことが、児童の主体的な学びにつながった。また、この年度より串間市でも1人1台のタブレットが導入されたため、授業にICTを取り入れることで、自分の動きを振り返ることができるようになり、自己との対話もより促されるようになった。課題としては、1単位時間ごとの授業改善をどのように行うべきかを考え実践していく必要があることが挙げられた。

また、昨年度、市内の体育主任会の協議では、ネット型ゲームを行う上で小規模校の特性として、「1学級当たりの人数が少なく、練習やゲームをチームとして行うことが難しい」という意見が多く出された。

このような実態を踏まえ、児童が進んで運動に親しみ、活動を通して児童が自己の課題に気づき、効果的な練習を通して、技能を身につけたり、自己の課題を解決して運動に親しむ態度を育成したりすることを目指し本主題を設定した。

III 研究の目標

運動の楽しさやできる喜びを味わい、運動に進んで関わる児童を育成する指導の在り方を究明する。

IV 研究の仮説

- 体育科授業において、主体的・対話的で深い学びの視点から、自分やチームの課題と向き合い、運動のポイントを意識できるような工夫を行えば、児童が運動の楽しさを実感し、進んで学習活動に取り組むことができるようになるであろう。

V 研究内容

1 指導方法の工夫・改善

- (1) 主体的・対話的で深い学びのある体育科授業の考え方の整理
- (2) 運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

2 技能向上を図るための手立てや工夫

- (1) ICT機器の活用
- (2) 運動アイデア集の作成

I 指導方法の工夫・改善

(1) 主体的・対話的で深い学びのある体育科授業の考え方の整理

串間市小体連では令和元年度に主体的・対話的で深い学びが達成された児童の姿について以下のようにゴールイメージを設定した。

串間市小体連の目指す児童の姿

- ① 課題を見つけ、解決に向けて主体的に運動に取り組む児童
- ② 人対人、人対教材などとの対話を通して、課題解決につなげることができる児童
- ③ ①と②の過程を通して、試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するにはどうすればよいかを考える児童

このゴールイメージ達成のために授業において、重視すべきポイントについて以下のようにまとめた。

- 児童に「運動のポイント」を意識させるために、一単位時間で児童に身に付けさせたい知識や技能に結びつく課題を設定し、主体的に話し合ったり、運動に参加したりできるようにする。
- タブレットなどの ICT 機器を活用することで、ねらいに沿った動きの発見やポイントを押さえた振り返りに役立てるようにする。

(2) 運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

実際の授業で活動を行うにあたって、児童に運動のポイントを意識させることを串間市の体育科のゴールイメージとした。その達成に向けて、串間市小体連では、運動のポイントに結びつく学習課題の設定に取り組んできた。課題解決のための練習や児童同士の対話を通して、児童自身が運動のポイントに気づき、児童の技能の知識・技能向上を目指す授業実践に取り組んだ。

○ 対話を生み出す発問の工夫(串間市立本城小学校の実践)

運動のポイントにつながる発問のために、授業中の教師との対話やグループの会話の中で運動のポイントにつながるキーワードを意図的に配置した。この授業では、プレルボールでアタックを打つ際のポイントについて児童に気づかせるために、「返しにくいボール」について、子どもたちに発問することで、課題意識をもって、どんなボールが返しにくいかを具体的に児童が考えた。

しかし、実際に教師や児童が実演することで、強さだけではなく立ち位置も重要であることを児童に気づかせるための発問を続けた。【図 1】これらの課題を解決する過程を通して、児童は、本時で気づかせたい運動のポイントであったボールを打つ強さや立ち位置について意識して、その後の練習に取り組むことができた。

また、児童が考えやすいように、実演の段階では、言葉での説明だけでなく写真なども活用することで児童の気づきを促す工夫を取り入れた。



【図 1】教師の発問と児童の反応

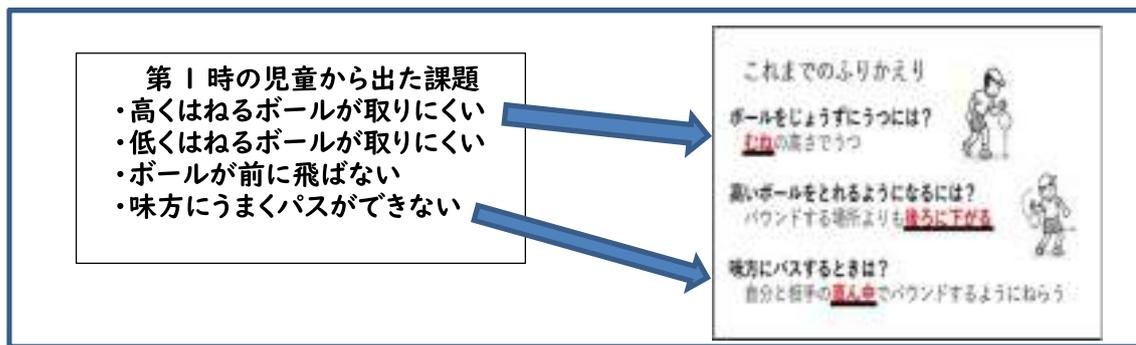


○ 児童の課題を学習課題として設定する。(串間市立北方小学校の実践)

プレルボールの学習において、児童が課題意識をもって、動きのポイントを考えるために第 1 時の時点で、試しのゲームを通して、児童自身がうまくいかないと感じた課題を挙げさせた。その後、第 2 時以降の学習で、児童から出た課題を学習課題として、話し合いなどを通して解決していくことで、動きのポイントに気づくことができるように工夫を取り入れた。



毎時間のまとめを掲示資料として蓄積していくことで、児童が振り返れるようにした。【図 2】



【図 2】第 1 時間の児童の挙げた課題と学習を通して作成した掲示物

2 技能向上を図るための手立てや工夫

(1) ICT 機器の活用

令和 3 年度より串間市でも 1 人 1 台タブレットが配付され、串間市小体連でも、体育科の授業におけるタブレットの活用について検証を行った。

児童のゲームの様子を動画で撮影することで、児童が自分たちの動きを客観的に捉えられるようになり、例えば、児童のプレーのよかった点を全体で共有することで、アタックで得点しやすいコースについて児童が理解を深めることができた。

また、タブレットを活用して、児童のワークシートを投影することで、話し合った自分たちの意見を学級の児童に説明する活動がスムーズに行えるようになった。



【自分たちのゲームの様子の視聴】



【自分の班の考えについて説明】

(2) 運動アイデア集の作成

運動のポイントを児童に実感させるうえで、児童数の少ない小規模の学校が多く、ゲームや練習を行って知識や技能の定着を図る場の設定や指導に自信がもてないという課題を多くの教員が抱えていることが分かった。そのために、まず学習指導要領に示される各学年で身に付けるべき資質や能力を明らかにした。これを基に各学年の発達段階の応じた教具の工夫や場の設定など少人数でも技能の定着を図れるような運動例を串間市小体連で作成した。



【高学年の例】



【中学年の例】

この運動アイデア集は、「運動のねらい」、「やり方」、「ポイント」というシンプルな項目で作成した。これは、教師だけが活用するものではなく、児童が自分たちの課題に応じて練習を選択するという活用もねらいとしている。



VI 研究の成果と課題

(1) 成果

- 児童自身の課題をもとに単元の目標や一単位時間の目当てを設定したことで、児童自身が課題意識をもつようになり、課題の解決に向けて主体的に取り組む活動へとつながることができた。
- ワークシートに思考ツールを取り入れたことで、児童が運動の特性を捉え、視点をもって自分たちの動きを考えるなど、対話的・共同的で深い学びにつながることができた。

(2) 課題

- 単元の目標を達成するために児童の実態に応じた練習方法やルールを設定していく場合、児童の実態の的確な把握とそれに適応した練習方法を選択することができる教師の指導技能を高めていく必要がある。
- 今年度、ネット型ゲームの運動アイデア集を作成した。これを各校で実際の授業に取り入れながら工夫と改善を進め、より有用性の高いものへと改善していく必要がある。

令和5年10月27日(2)校時
 第5・6学年1組(8名)
 場所 串間市立大東小体育館
 指導者 黒原麻由

1 単元名 ネット型(ソフトバレーボール)

2 単元の目標

- (1) ネット型(ソフトバレーボール)の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、個人やチームによる攻撃と守備によって、簡易化されたゲームをすることができるようにする。
 (知識及び技能)
- (2) ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
 (思考力、判断力、表現力等)
- (3) 運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。
 (学びに向かう力、人間性等)

3 運動の一般的特性

高学年のボール運動は、「ゴール型」、「ネット型」及び「ベースボール型」で構成され、ルールや作戦を工夫したり、集団対集団の攻防によって仲間と力を合わせて競い合ったりする楽しさや喜びを味わうことができる運動である。

低学年と中学年のゲームの学習を踏まえ、高学年では、集団対集団の攻防によって競争する楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、ボール操作とボールを持たないときの動きによって、簡易化されたゲームをすることができるようにし、中学校の球技の学習につなげていくことが求められる。

4 児童の実態

(1) 運動に触れる楽しさの体験状況

本学級の児童は、昼休みに鬼ごっこや一輪車を行う姿が見られる。一方で、ドッジボールなどのボールを使った運動は、あまり好まない傾向が見られる。

これまで体育科の学習では、「体づくり運動」や「水泳」などの内容において、教師や友達の動きを見て、自分の課題に気付き、その解決方法について考える機会が増えてきている。

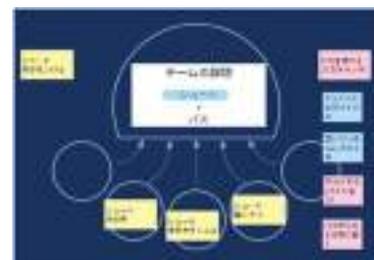
しかし、「ゴール型ゲーム」や「ネット型ゲーム」、「ベースボール型ゲーム」など、チームで活動することが基本となる運動については、競い合う経験が十分にできているとは言えない。

(2) 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の習得状況

「知識及び技能」に関しては、中学年までの間に、ネット型ゲームの学習を通して、ボールの返球や、ボールを持たないときの動きなどを学習してきている。しかし、ボールを相手コートにうまく返球したり、操作しやすい位置に移動したりすることなどの技能については十分に身に付いているとは言えない。

「思考力、判断力、表現力等」に関しては、課題を解決するために、クラゲチャート(図1)などの思考ツールを活用して自分のチームの課題を考える活動をしたり、考えたことを友達に伝えたりする活動をしてきた。しかし、規則を工夫したり、簡単な作戦を選んだりする経験は少ない。

「学びに向かう力、人間性等」に関しては、ルールを守って助け



【図1】クラゲチャート】

合って運動をする姿がよくみられる。しかし、体づくり運動等には積極的に取り組む児童が多い反面、ボール運動系の学習では運動への積極性に個人差が見られる。

(3) 体力の状況

	男子					女子				
段階	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
人数	0人	0人	3人	0人	0人	0人	1人	3人	1人	0人
%	0%	0%	100%	0%	0%	0%	20%	60%	20%	0%

体力テストにおいては、今年度の学級全体の総合評価の割合は、A・B段階は12.5%、C段階が75%、DE段階が12.5%という結果であった。男女ともに柔軟性や跳力などに課題があることが分かった。

5 学習を進めるに当たって

本単元では、ソフトバレーボールのルールを簡易化したゲームを段階的に行う中で、ボールをつなぐ楽しさや、相手コートに返球して得点する喜びなどを味わわせたい。また、自分のチームの課題から作戦や練習を選んだり、仲間と話し合ったりしながら、自分のチームの技能が向上した喜びやチームワークのよさなども感じ取らせていきたい。

単元を構成するにあたっては、「ソフトバレーボールの基本的な技能を高めよう」と「作戦を考えてソフトバレーボールを楽しもう」と、大きく2つの段階を設定する。

本単元の指導にあたっては、レシーブやトスのコントロールがうまくいかず、ラリーが続かなかったり、ボールに合わせてすばやく移動できなかつたり、狙った場所にアタックができなかつたりする状況が考えられる。そこで、本単元ではボールの操作がうまくいかなくてもラリーが続けやすいルール作りを念頭において、段階的に技能を習得できるようにする。

単元はじめのオリエンテーションでは、ソフトバレーボールのルール説明を行うとともに、「ゲームや練習に積極的に取り組むこと」「分担された役割を果たすこと」「仲間の考えや取り組みを認めよう」とすることについて考えさせ、主体的に学習を進めることができるようにする。チームは4人（ゲームは3人）を基本とし、一人一人が責任をもって積極的に取り組めるようにする。また、串間市の小学校体育連盟で作成した運動アイデア集を活用し、色々な練習方法に触れさせるようにする。試しのゲームでは、うまくパスが回らないことや、ラリーが続かないことなどに対して課題意識をもたせるようにし、単元の学習全般を通して、課題解決を図れるよう進めていく。

単元前半（ねらい1）では、「アタック、パス、レシーブなどの基本的な技能を高める」というねらいのもと、「相手コートへ返球する」や「味方が受けやすいようにボールをつなぐ」、「ボール方向への素早い移動をする」などの技能習得に焦点をあて学習を進めるとともに、身に付けた技能をゲームに生かせるように、ルールを工夫しながら授業を進めていきたい。また、課題解決につながる話合いができるように、話合いの進め方や目的を示すとともに、話し合う視点を明確にすることで、毎時間の課題を確実に解決できるようにしていきたい。

単元後半（ねらい2）では、「作戦を考えてソフトバレーボールを楽しもう」というねらいのもと、身に付けた技能を使いながら、チームの作戦に応じてゲームができるようにする。自分のチームの課題を見つけ、それに合った練習や作戦を考え、仲間と協力する楽しさ、できるようになった喜びなどを感じさせたい。また、単元の最後にソフトバレーボール大会を設け、それに向けて楽しんでプレイできるようにしたい。

単元を通して、チームの課題を解決するために、ゲームの中で友達の動きを見たり、声掛けを行ったり、動画を視聴したりするなどして、チームの課題に気づき、そのためにどうすればよいか考え、ゲームに生かすことができるようにする。

本時において、はじめの段階では、学校全体で取り組んでいる柔軟性を高める動きに取り組む。次

に、自分のチームの課題に応じて「運動アイディア集」から練習方法を選ばせ、技能の向上を図るようにする。

中の段階では、前回のゲームの様子を動画で確認し、課題の確認を行う。本時のめあてを提示し、考える視点を焦点化させて学習を進めていく。本時の課題についてチームで話し合い、どのような位置にいるとボールをつなぐことができるか2つのパターンから考えさせる。考えたことをもとにチームで練習を行い、立ち位置を意識しながら取り組めるようにする。

ゲーム1では、「第1触球者はワンバウンドでレシーブをしてもよい、第2触球者はボールをキャッチしてパスしても良い」というルールで行わせる。これによって、ボール操作の技能がうまくいなくても、ボールをつなぐことができるようにしていきたい。

また、ゲーム1の後には、ゲームの振り返りを行う。撮影した動画を視聴し、レシーブをどの位置の人がしていたか確認させ、後方の人がレシーブできる位置に動いていたかを話し合わせることで、ゲーム2につなげるようにする。

まとめの段階では、ボールをつなぐための立ち位置を中心にゲーム全体を振り返る。その際、自分や友達の良かった点や課題についてワークシートにそれぞれ記入させ、仲間通して、自分たちの良かった点や課題を伝え合うようにしていきたい。

また、単元全体を通しての指導として、カリキュラムマネジメントの視点から、5年生の保健で学習した「心の健康」「けがの防止」や6年生の「病気の予防」を安全やチームワークといった点から想起させることで、「ソフトバレーボール」の学習の意義を一層深めていきたい。さらに、道徳の授業「あきらめない心」や「相手を理解する心」などの学習を通して、本単元の学習に対する主体性や友達との関わり方の工夫につなげるなど、教科等横断的な学びの実現も意識しながら指導を進めていきたい。

6 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容のまとめ 評価規準 ごとの	次の運動の行い方を理解しているとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをしている。 ・ネット型では、個人やチームによる攻撃と守備によって、簡易化されたゲームをしている。	ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりしているとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	運動に積極的に取り組もうとし、ルールを守り助け合って運動をしようとしていたり、勝敗を受け入れようとしていたり、仲間の考えや取組を認めようとしていたり、場や用具の安全に気を配ったりしている。
単元の 評価規準	① ソフトバレーボールの行い方について、言ったり、書いたりしている。 ② 味方が受けやすいようにボールをつなぐことができる。 ③ 片手、両手を使っての相手コートへの返球をすることができる。 ④ ボールの方向に体を向けることとボール方向への素早い移動をすることができる。	① 誰もが楽しくゲームに参加できるように、プレイヤーの人数、コート広さ、プレイの制限、得点の仕方などのルールを工夫している。 ② 自己やチームの特徴に応じた作戦を選んでいる。 ③ 課題の解決のために自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	① ネット型の簡易化されたゲームや練習に積極的に取り組もうとしている。 ② ゲームを行う場の設定や用具の片付けなどで、分担された役割を果たそうとしている。 ③ ゲームや練習の中で互いの動きを見合ったり、話し合ったりする際に、仲間の考えや取組を認めようとしている。 ・ ルールやマナーを守り、仲間と助け合おうとしている。 ・ 勝敗を受け入れようとしている。 ・ ゲームや練習の際に、使用する用具などを片付けたり場の整備をしたりするとともに、用具の安全に気を配っている。 (規則、勝敗、健康・安全については、他のゲームの単元で重点的に指導を行う。)

7 指導と評価の計画（8時間）

		1	2	3	4	5	6（本時）	7	8
指導内容	知	①知識 (ソフトバレーボールのルールを知る)	③技能 (相手コートへ返球する)	②技能 (味方が受けやすいようにボールをつなぐ)	④技能 (ボールの方向へ体を向ける・素早い移動)				
	思					①思考・判断 (規則を考えている)	③表現 (他者に伝える)	②思考・判断 (作戦を考えている)	
	態		②公正・協力 (分担された役割を果たす)		①愛好的 (積極的に取り組む)			③責任・参画 (仲間を認める)	
学習過程	10分	ねらい1 ソフトバレーボールの基本的な技能を高めよう。						ねらい2 作戦を考えてソフトバレーボールを楽しもう。	
		1 準備、整列、挨拶、準備運動	1 準備、整列、挨拶、準備運動 2 主運動につながる運動（運動アイデア集より選択）						
	5分	2 単元の学習内容を確認 ○ 動画視聴 ○ ルール ○ 約束 ○ チーム ○ 主運動につながる運動 ○ ボール操作の練習	3 本時の学習内容を確認 「どのようにアタックをすればよいのだろうか。」	3 本時の学習内容を確認 「どのようにレシーブをすればよいのだろうか。」	3 本時の学習内容を確認 「どのようにレシーブをすればよいのだろうか。」	3 本時の学習内容を確認 「みんなが楽しめるルールを考えよう。」	3 本時の学習内容を確認 「3段攻撃をするためのボールをつなぐ立ち位置を考え、仲間に伝えよう。」	3 本時の学習内容を確認 「これまで学習してきたことを生かしてチームで作戦を立ててプレイしよう。」	3 本時の学習内容を確認 「チームで考えた作戦に沿ってソフトバレーボール大会を楽しもう。」
20分	3 試しのゲーム	4 チームでの話合い 5 本時の学習を身に付けるための練習 ○ アタック的当て 6 ソフトバレーボールゲーム(1番目はキャッチあり、2番目はキャッチあり) ○ ゲームの振り返り 7 ソフトバレーボールゲーム2	4 チームでの話合い 5 本時の学習を身に付けるための練習 ○ 対面トス 6 ソフトバレーボールゲーム(1番目はキャッチあり、2番目はキャッチあり) ○ ゲームの振り返り 7 ソフトバレーボールゲーム2	4 チームでの話合い 5 本時の学習を身に付けるための練習 ○ レシーブ練習 6 ソフトバレーボールゲーム(1番目はワンバウンドあり、2番目はキャッチあり) ○ ゲームの振り返り 7 ソフトバレーボールゲーム2	4 チームでの話合い ・コート ・ネット ・得点 ・時間 5 本時の学習内容を身に付けるための練習 ○ 3段攻撃練習 6 ソフトバレーボールゲーム(1番目はワンバウンドあり、2番目はキャッチあり) ○ ゲームの振り返り 7 ソフトバレーボールゲーム2	4 チームでの話合い 5 本時の学習内容を身に付けるための練習 ○ 3段攻撃練習 6 ソフトバレーボールゲーム1(1番目はワンバウンドあり、2番目はキャッチあり) ○ ゲームの振り返り 7 ソフトバレーボールゲーム2	4 作戦を選んで、動きの練習をする。 5 ソフトバレーボールゲーム1 ○ ゲームの振り返り 6 ソフトバレーボールゲーム2	4 ソフトバレーボール大会 ○ チーム練習 ○ 1試合6分×2 ○ 反省、作戦タイム ○ 1試合6分×2	
10分	○ 片付け、まとめ、振り返り ○ 次時の予告								
評価の重点	知	①知識【観察】		③技能【観察・動画】	②技能【観察・動画】	④技能【観察・動画】			
	思					①思考・判断【ワークシート】	③表現【観察・ワークシート・動画】	②思考・判断【観察・ワークシート】	
	態		②公正・協力【観察】		①愛好的【観察】			③責任・参画【観察】	総合的な評価
準備物	ボール、支柱、ネット、コーン、プロジェクター、得点板、タブレット								
カリ・マネ	保健療育：けがの防止（第5学年）、心の健康（第5学年）、病気の予防（第6学年） 道徳科：「あきらめない心」「相手を理解する心」								

8 本時の学習（6/8時間）

(1) 本時の目標

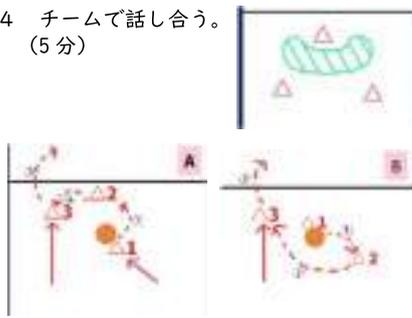
- 3段攻撃をするためにボールをつなぐ立ち位置について、自分や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

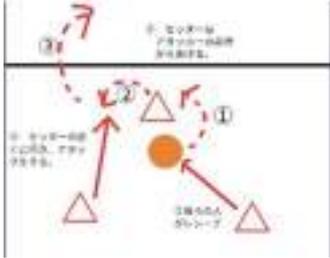
(思考力、判断力、表現力等)

(2) 本時の評価項目

- 課題の解決のために自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。(思考・判断・表現)

9 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	○：評価項目 (評価方法) 【Aの例】	「努力を要する」状況と判断される状況への手立て
(10分) はじめ	1 用具の準備、集合、挨拶 2 主運動につながる準備運動(7分) ・柔軟性を高める動き ・チームで練習 (運動アイデア集から選択)	○ 個人・チームの課題に合わせて練習方法を選択できるよう、練習方法を提示する。		
なか(28分)	3 前時の課題と本時のねらいの確認(2分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 3段攻撃をするためのボールをつなぐ立ち位置を考え、仲間に伝えよう。 </div> 4 チームで話し合う。(5分)  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> Aパターン 後方のプレイヤーがボールをとり、前方のプレイヤー、アタッカーへとつなぐ。 Bパターン ボールに近いプレイヤーがボールをとり、後方のプレイヤー、移動してきたアタッカーへとつなぐ。 </div> 5 本時の学習内容に沿った練習(5分) ・1対3での攻撃練習(①反対側のコートからサーブ②レシーブ③トス④アタック) ① 反対側のコートからサーブ ② 後方の2人のどちらかがレシーブ(ワンバウンドあり) ③ 前方のセッターの児童がネット際でトス ④ セッターの後方(利き手)からアタック	○ 前回の振り返りで出た課題(ボールが繋がらないでゲームが続かない様子)を確認するために、全体で動画を視聴する。 ○ ボールをつなぐための立ち位置を考えるために、網掛け部分にサーブが落ちた場合、誰が取るべきか、どのようにつなぐべきかAパターン、Bパターン中でどちらがが良いと思うか話し合わせる。 ○ 児童が考える際のヒントとするために、今まで学習してきた、「レシーバーはコートの中央」「セッターはアタッカーの前方(利き手側)から」「アタッカーはネット際から」などの運動のポイントを掲示しておき、必要があれば声をかけて確認する。 ○ 学級全体で意見を共有する。 ○ 話し合いで出てきた良い立ち位置に動いているか確認させる目的で、良い動きがあれば称賛する。	○ 課題の解決のために自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。(観察・ワークシート・動画) 【課題の解決のために自己や仲間の考えたことを他者に詳しく伝えている。】	○ 「サーブや相手から返球されたボールを誰が取るのか」声をかけ、仲間内で伝えられるようにする。

<p>なか (28分)</p>	<p>6 ゲーム1 (5分間)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>〈基本的なルール〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コート内は3人 ・サーブはアンダーサーブ。サーブミスした場合は下から投げ入れる。 ・ボールに触れる回数は1人1回。 ・ブロックはしない。 ・得点したチームはローテーションをする。 ・1番目はワンバウンドあり ・2番目はキャッチしてもよい </div> <p>7 ゲームの振り返り (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 撮影した動画を見て振り返る。 ○ 次のゲームに向けて話し合い・練習 <p>8 ゲーム2 (6分間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲームの振り返りの際に立ち位置を確認するために、動画をコート的前方からワンサーブごとに撮影させるようにする。 ○ 後ろの人がレシーブをすることができているか意識させるために、後ろの人がボールを取ることを声掛けする。 ○ 立ち位置を確認するために、動画を視聴し、後ろの人がレシーブをすることができていたかどうか振り返らせるようにする。 ○ 次のゲームにつなげるために、改善点を出させる。 	
<p>まとめ (7分)</p>	<p>9 本時のまとめ・振り返り (6分)</p> <p>※ 記入例</p>  <p>10 次時の見通し・片付け・挨拶 (1分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボールをつなぐための立ち位置に動いていたかどうか振り返るためにワークシートに記入する時間を設ける。 ○ チームメイトがボールをつなぐための立ち位置に動いていたか確認するために、よかった点やアドバイス等を仲間に伝える時間を設ける。 ○ 安全に気を付けて片付けを行うよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ なかなか振り返ることができない児童には、「サーブや相手から返球されたボールを後方の人がとることができていたか」という視点を与える。